

さった。私はすごく嬉しくなつて  
“頭が痛い”なんて事を忘れて、  
吐き出すように母親への不満を話  
したのだ。私の母は、その当  
時、仕事が忙しく、甘えん坊の私  
は、母にかまってもらえないこと  
を随分不満に思っていたのだ。つ  
た。頻繁に保健室通いをする私を  
診て、(何かあるな)と感じたT先  
生は、その時間を利用して、健康  
相談をしてくださったのだ。私は  
その一時間、思う存分話しを聞い  
てもらったお陰で、心の安定を取  
り戻し、それからは保健室通いも  
めっきり減り、元気に過ごすよう  
になった。後から母に聞いた話だ  
が、その後しっかりとT先生は私  
の母に手紙をくださり、私の気持  
ちを母に上手に伝えてくださって  
いたのである。

さが私を救ってくれたのである。  
今日もまた“弱つかす”になり  
かけた子供たちが、保健室を訪れ  
私にいろんなものを吐き出してい  
く。たまに叱ったりする時もある  
が、基本はその子供の“弱つかす”  
を愛情をもって受けとめてあげる  
ことと自分にいい聞かせ、あの時  
のT先生になりきる私である。  
(南郷村立南郷中学校養護教諭)

## 教員になつて

佐々木 潤 子



学生のころから目指していた教  
員の道に入つて半年余りが過ぎよ  
うとしている。無我夢中で過ごし  
てきた半年は、今振り返るとあつ  
という間の出来事に感じられる。  
四月、これからの教員生活への  
期待と共に不安も抱えながら子供  
たちの待つ教室に入った。笑顔の  
絶えない、元気な子供たち。始め  
ての事ばかりで余裕のない私に、  
次々と話しかけてくる子供たちに  
四苦八苦しながらも、子供たちに  
受け入れられたという安堵感を  
もったことを覚えている。また、学  
校の事については私よりも先輩で  
ある子供たちは、私にいろいろ教  
えてくれた。

このようにして、私と子供たち  
の二人三脚とも言えるような学校  
生活が始まった。私も精一杯なら、  
子供も精一杯私にぶつかってくる  
という充実した日々である。  
しかし、子供たちと生活してい  
ると、いつもにこにこしてばかり  
はいられない。私が担任している  
三年生というと、善悪の判断はあ  
る程度ついていても、ついたりず  
らをしてしまったり、相手が傷つ  
くような言葉を発してしまつたり  
して喧嘩になることが日常茶飯事  
である。そうになると、心を鬼にし  
て厳しく注意しなければならな  
い。教師と子供という上下の関係  
ばかりではなく、時には友達のと  
うに気軽に話したり、一緒に遊ん  
だりという子供との関係を望んで  
いた私にとって、子供を注意する  
ことはつらいことであつた。何か  
子供たちと離れてしまふ気がし  
て、常に心の中に葛藤があつた。  
しかし、子供たちは、私が思つ  
ているほど子供ではなかつた。注  
意されたからといって離れていく  
ことはないし、むしろ、いけない  
事をしたら注意し、良い事をした  
らほめる私を見て自分たちの善悪  
の基準を築き上げていたのであ  
る。このことに気付いたのは、そ  
の基準を基にして、子供たち同士  
が注意し合っている姿を見た時で  
ある。このことにより、子供たち  
の模範として自分の言動に責任を  
もつことの重要性を実感した。  
教員生活は、まだ始まったばかり  
であるが、たいへん充実してい  
る。先輩の先生方からのアドバイ  
スを自分の宝物とすると共に、自  
分から多くのことを学び、日々成  
長する教師になりたいと思う。  
(浪江町立浪江小学校教諭)